

# 目 次

## MOKUJI

### 特別企画 1

私にとって○△とは ー学生の未熟なつぶやきー	1
※ 私にとって姓名判断とは	社会文化・某 1
※ 私にとって外国語を学ぶこととは	1年 斉藤節子 2
※ 某学生が暇な時に考えた事	環境科学・某 3
※ 私にとってフェミニストとは	西田計 4
※ 小人の思念	岩田尚文 5
※ 僕にとって雲とは	地域文化・天野 7

● ハノイの思い出	林道恵 8
● 総合科学部と旧制広島高等学校同窓会について	環境科学 黒岩祐治 9
● ニューヨーク散見	志邨晃佑 11
● 仙人にはかなわない	記者M 14
● シェークスピアのソネット 「愛の虚構」	田淵実貴男 17

### 特別企画 2

#### 三つの書評

※ 思想のドラマトウルギー	今堀誠二 19
※ 近代能楽集	中川徳之助 20
※ 私が・棄てた・女	水島裕雅 21

● 勝者は語らず・敗者は語る	環境科学M 23
◇ 学部の記録	24
◇ 編集後記	25



## 特別企画 1

### 私にとって○△とは

——鎮魂歌風の書き出し——

人は、自己を語り尽すことを欲し、語り尽せずして沈黙に至る。人は沈黙の淵に身をおきながら、ばらばらに崩壊してしまった自己をそこに観るだろう。

人はそこで、自己という精神との野合を裏切り裏切りして生きてきた 自分の過去という名の軌跡をふりかえるだろう。“私”を透過していった時間に無感覚に私はひっかかって行ってしまい、後に残さ

れるのは虚妄の自分だけなのかもしれない。

一種の生理的な直観が心の髄を走り、時との肉感をかもし出したとしても、それは瞬間、無数の灰となって飛び散ってしまうだろう。そうなると、人は皆、ただ一つの光点もない“やみ”の中で時間を食らう沈黙のような存在ではないだろうか？

### 私にとって姓名判断とは

社会文化コース2年・某

先日、学生広報委員のA君から、原稿を依頼されたのであるが、今までの方々のように、意味深いもの、お堅いものは小生には、無理であるし、ましてや、無理押しをしたところで笑止千万ともなりかねない。

したがって、ぐっと俗物的になってしまうが、小生の青春の中で、比較的重きをなした姓名判断をとり上げてみたい。

小生は幼少<sup>がき</sup>の頃より、多芸多趣味という点において、一族郎党はもとより、友人間でもかなり有名であったと信じる。

しかしながら、姓名判断という占いの一種にまで手をつけようとは、小生を苦しみ多き現世に出現せしめた母親さえ思わなかった。

いつの頃から、姓名判断に興味を持ったかは定かではない。しかし、高一の頃100円で買った説明書がボロボロになる位、熱心になっていた事は憶えている。それだけでは満足せず、家にあった本（実は、父もこういう占いが好きであったが、腕の方は中の上であった。）を全部読みあさった。

その結果、高校の成績が、あらよ、あらよという間に、落ちていった。

ところで世の数多くのお方は、姓名判断なんて、所詮は占い、当るも八卦当らぬも八卦というであろう。これに対して、古今の姓名判断家は、姓名判断は3000年来の統計の結果であると反論してきたと

いう。

小生は、姓名判断は単なる占いであるから、当るも八卦当らぬも八卦でいいと思っている。

しかし、結構当るもの、いろいろと便利なこともある。

姓名判断には、数多くの流派があるが、どれも、名前つけ（これを名付けという）と姓名の吉凶を占うの二つから構成されている。

しかし、使うのは、画数と配合・配列・音霊と二つとも同じである。

流派の違いは、画数の解釈の違いと考えていただければ、まず間違いない。

少々専門的になってしまった。ここで、本題にもどることにしよう。

高三の時であった。僕に説教したお偉い方がいらっしまった。

「おい、お前。姓名判断をやったところで、成績が上がる訳じゃなし、もっと受験勉強に役立つものをやったらどうだ。」

こうあからさまに、言った訳ではないが、こういう意味の事を言ったのである。

この方、東京は駒場にあるという某国立大学の文Iとやらへ入ったそうである。

しかし、小生は、この男に負けたとは思わないと言ったら嘘になるだろうが、完全なる敗北であるとも思わない。

たしかに彼は、頭の切れる奴であった。しかし、何の趣味もない（少々オーバーと思う方もあるだろうが、趣味と言えそうなのは、六法全書をめくることだけであった。）、三無主義の典型みたいな男であった。

小生も彼と似ているところが多々あった。すなわち、何事にも無感情であった。

文化祭、体育祭で騒いでいても、酒を飲んでいても、感情だけは醒めていた。

しかし、高三の頃には、小生も腕を上げ、プロ級とは言えないまでも、完全に素人の域は脱し、玄人へ近づいていた。

その頃ちょくちょく父のところへ相談に来る人を、父の代りに姓名判断をしていた。

その人達は、まことに真剣であり、醒めた感情の介在の余地はないことに気付いた。

その人達に小生は教えられた。その人達が、父の下へ相談に来るのは、腕がいいからではない。相談に来る人達と同じように真剣になり、醒めることなく、しかし自己を失うことなく相手の中に没入できるからであると……。

小生は、この境地に近づき、そこに到達しようと今後思いつづけるであろう。



## “私にとって外国語を学ぶこととは”

50101053 齊藤節子

あるとき雑誌を読んでいると、小学3年生の子がスペイン語を習っているという記事があった。少々あっけにとられたが、自分で進んでやっているらしく、そんなに早くから外国語に接する気を持てたのは羨ましいと思う。

私たちの年代では、英語以外の外国語を大学以前に習った人は少ないと思う。英語を使う機会もめったにないのに、なぜこのうえ他の外国語を習う必要があるのかと、不満を抱く人もあるだろう。それでも、興味のある人にとっては、あらゆる外国語が自由にこなせることを望んでいる。しかし、言語学専攻などの人ならば、言語それ自体が目的となろうが、私の場合は、言語はその国の文化を知る重要な手段でしかすぎない。

現代のように、一国だけの力では存在していけず、

各国が互いに依存し合っていくような国際化社会においては、各国間の歴史に基づく深い溝を埋め尽くすことは難しいが、その溝を少しでも小さくしていくことが必要である。そのためには、相手国の立場を理解し、尊重しなければならない。もし、言語が、文化の蓄積に最も貢献してきたものとすれば、相手の国で話されている言語を学ぶことが、一番の近道ではないだろうか。ところで、言語の発生は、文化の発生と同じくらい古い。他の動物が、直接の体験によって、生活方法を世代から世代へ伝えていくのに対し、人間は言語を手段として、さまざまな文化を蓄積してきた。言語が文化を代表するといっても過言ではないと思う。私たちの生活から、ことばを取りあげたら、いったいどうなるだろう。

また、外書は翻訳で読むこともできる。しかし、

たとえば、文学において、翻訳で読めば、本当にそれで、シェークスピアなり、ゲーテなり、トルストイなりを読んだことになるだろうか。私たちの感動は、訳者の目を通じたものであり、訳者のその文体に強く影響されていると思う。同じ作品でも、読後感が随分と違う。明治時代と現代との翻訳を比較してみれば、よくわかるだろう。それでも原文は同一なのである。原文で読む価値は、ほんの少しでも日本的なものの考え方を離れて、その国民の精神性に触れるところにあると思う。これは、歴史的に積み重ねられた発想の転換を行なうという点でひじょうに難しいが、その努力なしには、結局、自国民の進歩もありえないと思う。

日本語のいわゆる倭語と漢語との関係は、英語のアングロサクソン語とフランス語などの外来語との関係に似ているという考察を、何かの本で読んでこ

とがある。また、『平和』ということば一つをとってみても、国により時代により、それに負荷される意味が微妙に異なるという話もある。これらのことを考えるにつけ、言語の異なる国家、国民との交わりには、言語は、背後に長い歴史を担っているだけに、きわめて注意を要するものといわなければならない。

私的なことではなく、一般的なことばかりになってしまったが、繰り返して言えば、私にとって、外国語を学ぶことは、それ自体が目的ではなく、その国の文化を知る重要な一手段である。

1975年

10月20日

## 「某学生が暇な時に考えた事」

環境科学コース2年 某

我々は何らかの目的を持って大学へはいつてきた。おそらくその目的というものは、何々を勉強したいというものであろう。何々を勉強したいというように具体的にではなく、少なくとも勉強したいという考えを持っているにちがいない。では、実際に勉強しているのかということになってくると甚だ疑問である。全く勉強しないという学生はいないと思うが、自分の事をよく考えた上で身を入れて勉強している者もないと思う。多くの学生はただ何となく勉強しているのではないか。つまり、自分が将来何をしたいかという具体的な目標を持っていないために、やるべき事が定まらない。何をどうしたらよいのか、わからないのである。勉強、勉強といってきたが、大学での講義だけが勉強ではない。このことはいわなくてもわかることであろう。大学の講義を補足的なものと考えたい。補足的だからといって、決しておろそかにしてはいけない。補足的だからこそ、しっかりと勉強すべきなのである。勉強している内容自体は、もちろん重要であるが、それ以上に重要なものが勉強に取組む態度であると思う。大学で習っている事が果して社会に出て役立つかどうかは知らないが、勉強に取組む、ある物事に取組むという態度

は役立つものと信じる。

確かに大学生には暇な時が多い。高校を出て卒業した者から見れば、羨ましがられるほどである。高校時代から耳にはしていたが、こんなにも暇とは思っていなかった。あまり暇だというと、忙しくて休む間もない人達から睨まれるので程々にしておくが、ここでいいなのは、この暇な時間をどのように過ごすかということである。考え方によれば、こんな事はどうでもよい事であって、自分の好きな事、やりたい事をやるさというであろう。要するに、自分の時間であってこの時間をどう過ごそうと自分の意志に一任されているのである。同じ過ごすなら、有効にこの時間を使いたいものである。社会に出れば色々な制限が加わって暇な時はほとんどない。余暇を有効に利用すれば、大学の講義から得るものよりはるかに次元の高いものが得られると思う。もちろん、これら得るものは異質のものであるが……。大学での講義はそのほとんどが、我々学生側からすれば受身形式である。講義を聞いているだけでも、何かは頭に残るものである。ところが、暇な時はそうはいかない。外界が自分に働きかけることはないのである。自分から働きかけないとも得るものがな

いのである。残るのは後悔だけか。

我々は、中学生時代には高校に行けば何かある、高校生時代には大学へ行けば何かあると思っていた。でも実際のところ、何があったであろうか。果して、自分の望んでいたものがあったであろうか。自分の考えていたのはこんなものじゃない。でも、他に何かあるというのか。自分から求めなければ、何も得られない。

以上、偉そうな事ばかり書いてきたが、ここまで来て後悔の念無きにしもあらずである。よくまあ、こんな事を考え何のためらいもなく書き進んできたと思う。読み返すのが恐ろしい位である。上でいう暇な時に考えた事を書いたまでであるが、内容自体は何でもないことであり、誰もが一度は経験することであると思う。内容はどうでもよいわけであって、要するに、その内容(対象)に対して自分が如何に取組んだかである。深夜に考え書いたものだから、

理性だけでなく感情が加わっている。従って、昼間の冷静な頭で読み返すと本当に恐ろしいものである。筆者の希望としては、この文章を深夜に読んでいただきたい。内容がくだらないので、読み返される危険性はないと思うが、もし誤って読み返されることがあっても、深夜以外にはその行為を実行なさらないように。



## 私にとってフェミニストとは

社会文化コース2年 西田 計

以下、独善と偏見に満ちた意見を書く。ぼくは下宿生活をしているのだが、冬に洗濯やら食器を洗うのが邪魔臭くてしかたがない。女性はよくあれに我慢しているものと感心させられる。女性はあの様な下らない労働に自分の一生を捧げて満足しているのだから、男もよく女を飼い馴らしたものだ。

しかし、歴史的には男性が惨めな状態におかれた時もあった訳で、初期資本主義の段階がそうであろう。資本は安価な労働力を求めて、女性労働者を男性に優先して雇った。困ったのは男性である。家庭で威張っていた男性の収入源は失われ、かといって家政婦の真似事はできない。そこで思いついたのが、女性を社会から締め出して家庭に閉じ込めておくことである。かくして女性の社会的職業は失われ、女性は全て家政婦になることを強制された。

幸いな事に女性は馬鹿だから、自分達が男性によって支配されあるいは抑圧されていることに気づかない。男性はその事実を認識していても決して女性には気づかせない。女性に残された職業としては、

ポルノ女優か売春婦、あるいは家庭で家政婦兼母親だけである。性行為を目的とする売春婦か、生殖を目的とする母親。どちらにしても性的存在以上の何物でもない。政治や会社の指導的役割を果す女性は一人もいない。女性の側でも、いい男を見つけて結婚しようという意志以外は持ち合わせていないから、自分達の敵である男性を攻撃しないで、女性同志で醜い争いを続けている。これは女性の虚栄心(男には負けても他の女には絶対負けられない)の贈物であろうか。

一部には、女性は家庭で男性は社会でもって、それぞれに適した仕事を、あるいは女性は生命の生産を男性は生活資料の生産をすればよい、という性的分業を説く者もいるが、女性の染色体の中に家政婦に適する遺伝子が含まれていることはまだ知られていない。心理学でも性差を強調して、性的分業を肯定する向きがあるが、心理学が言っているのは社会的強制を受けた後での男性と女性との性差を言っているのであって、結果的にそうであるというにすぎ

ない。

性差が、なぜ、どのようにして生まれてきたかを見抜くためには、生理学的な考察および男性と女性を作った歴史を考察しなければならない。すなわち、女性は生まれながらにして、感情的具体的思考しかできないのかどうかを生理学的に明らかにし、マルクスが歴史を通して有産者の無産者に対する支配を見抜いたように、男性の女性に対する支配、抑圧を歴史を通して見抜かなければならない。デカルトが自我以外の全てを疑っても、ルソーが自然状態を想定して社会契約を説いても、フランス人権宣言が自由・平等を謳っても、リンカーンが奴隷を、マルクスが労働者を解放しても女性は参政権を得ることができなかった。思想の革命を行った人々が全て男性であったからだ。ここにおいて、女性を解放できるのは女性自身でしかない、ということが明らかにな

った。

日本国憲法が自由・平等を宣言しても、所詮法の下での自由・平等でしかなく、売春防止法が施行されても売春婦は現存する(らしい)。女子大等で女性専用の講義をして思想統制を行っている現状を見ると、フェミニストとしてのぼくは耐えられなくなる。世の女性は馬鹿であることは充分承知しているが、一部の馬鹿な男性にも実質的な自由・平等があるのだから、女性にもそれを与えてやってもいいような気がする。

最後に逆説的な事を書くようであるが、女性が、男性の労働が自分達の労働より苦労が多いことを知っていて、自主的に職業選択の自由を放棄している、という事実を察知している男性はほくだけであろうか？

24日夜

## 小人の思念

情報行動科学コース2年 岩田尚文

甲 「何故、そんなに沈み込んでいるんだ、憂うつ  
そうな顔をして」

乙 「別に、ただ静かにしているだけだ」

甲 「それなら、そんな不機嫌な顔をするのはやめ  
て元気をせよ」

乙 「元気はあるよ。ただ、顔に出さないだけだ」

甲 「何もそんなに無理をして、不自然に振舞う事  
もないだろう」

乙 「いいじゃないか、俺の勝手だ。俺は、こうし  
ている方が気楽なのさ」

甲 「それは、嘘だ。お前は、自分の心を欺してい  
る」

乙 「いや、違うんだ。こうしていれば、誰にも…  
……」

甲 「お前は、ただ自分の事だけしか考えていない  
のだろう」

乙 「その通り。それなら、どうだっていうんだい」

甲 「少しは、みんなの気持も考えたらどうだ。お  
前がそんなふうだと、みんなが心配するじゃ  
ないか」

乙 「余計な御節介とは、この事だ」

甲 「みんなに迷惑をかけているのがわからないの

か。お前は、それで平気なのか」

乙 「……俺の事は、ほっといてくれ」

甲 「逃げるのか、卑怯者」

乙 「ああ、俺は卑怯者さ。どうせ、つまらない人  
間さ。俺は、他人に悪い影響を与える事しかで  
きない男なのだ」

甲 「どうして、そんなに自分を卑下するのだ。  
何故、自分の心を素直に表わそうとしないのだ。  
そんな事をしていると、みんなから軽蔑される  
ぞ」

乙 「軽蔑、……結構じゃないか、してもらいた  
いね。俺は歓迎するよ」

甲 「いやに、強情だな。そんなに、軽蔑してもら  
いたいのかね」

乙 「ああ、そうさ」

甲 「お前は、軽蔑されるという事がどういう事か  
知っているのか？ 軽蔑された事がないのら  
う。だから、そんな事が平気で言えるのだ」

乙 「……………」

甲 「軽蔑されるという事は、本当に辛い事なんだ  
ぞ。その苦しきも知らないくせに、軽々しく口  
にするのはやめろ」

- 乙 「だから、軽蔑されてみたいんだ。何か強い衝撃を受けてみたいんだ」
- 甲 「どうして、何も好んで、自分自身を傷つける事はないじゃないか。ただ、辛い思いをするだけだぞ」
- 乙 「そうかも知れぬ。けれど、陽気に生きて行く事が、何かかみっともないような気がしてきたんだ」
- 甲 「おかしな事を言うな。陽気に生きて行けるのは、しあわせじゃないか。お前は、友達にも恵まれている。囲りを見てみろ。みんな、お前の友達じゃないか」
- 乙 「ああ。しかし、俺はもう疲れたのだ。『みんないい奴ばかりだ』とおせじを使うのが嫌になったんだ。だからといって、『中には嫌な奴もいるんだ』と大声で叫んでみる勇氣もない。つまり、憶病者なんだよ、俺という男は」
- 甲 「……………」
- 乙 「そればかりではない。俺は友達のためだと思って、人を傷つけた事もあるんだぜ。こんな自分が、嫌になったんだ」
- 甲 「そんな事、人間である以上誰もが背負っている悩みだ。お前だけじゃないよ。みんな、それなりに悩んでいるんだぜ」
- 乙 「とにかく、俺は一人でいたいのだ」
- 甲 「それが、おかしいんだよ。何故、一人でいたいなんて考えるんだ」
- 乙 「一人になるのに、理由があるのかい」
- 甲 「人間は、一人では生きて行けないんだぜ」
- 乙 「とにかく、他人と係わり合うのが煩わしいんだ」
- 甲 「他人と係わり合う事なしに、生きて行けると思っているのかい。そんなに一人になりたいのなら、無人島にでも行って暮らしてみるがいいさ。お前のような奴には、良い薬になるぜ」
- 乙 「そうかも知れんな。お前の言う通りかも知れぬ。俺が、間違っているのかも知れぬ」
- 甲 「だから、そんなにひねくれないで……。お前は、少し深刻に考え過ぎなのだ。陽気に暮らす事ができるというのは、結構な話じゃないか」
- 乙 「でも、やはり、私は実行してみたいんだ。果して、自分にどこまでできるのか挑戦したいのだ」
- 甲 「無意味な挑戦のような気がするなあ」
- 乙 「そうかも知れぬ。けれど、何となく意地を張り通して逆らってみたいのさ」
- 甲 「今だから、みんなが心配してくれているけれど、いつもそんなふうだと、必ず誰も心配なんかしてくれなくなるぞ。それが訪れた時、きつと後悔するぞ」
- 乙 「いいんだよ。みんなに迷惑をかけるよりは、その方が、俺も気が楽だ」
- 甲 「おかしな奴だな、お前という男は。しかし、お前が何と言おうと、俺は知っているんだぜ。本当は、みんなにわざと心配をかけて、構ってもらいたいのだ。つまり、お前は、人から無視される事を、ひどく恐れているのだ。口では、『みんなから軽蔑されてみたいんだ』などと強気な事を言っておきながら、本当は、そうなる事を少しも望んではいないはずだ」
- 乙 「……………」
- 甲 「それに、もう一つ。お前は、他人に迷惑をかけるという事をも、ひどく恐れているはずだ。人を傷つけるという事に、ひどくおびえているはずだ。それで、他人と接触を持たなければ、傷つける事はない、というつまらぬ考えから、『他人と係わり合うのが煩わしいんだ』などと言って、本当の心をごまかしているのだ。どうだい、当たっているだろう」
- 乙 「何を！ 勝手な事ばかり並べやがって……。下手な詮索はよしてくれ。お前なんかに分かってたまるか！」
- 甲 「おいおい、そんなに向きになるなよ。下手な詮索とは思っていないのだけれど……」
- 乙 「……お前には俺の本当の気持なんか、理解できるはずがない。いや、お前ばかりではない、他人には俺の心は決して分からぬ」
- 甲 「その通りだ。お前の言う通り、確かに分かりはしない。とにかく、何をしようとお前の勝手だが、他人に迷惑をかける事だけは、するなよ。必ず後悔するぜ、特に、お前のような奴は」
- 乙 「ああ、本当は、分かっているのだ」
- 甲 「我がままな奴め」
- 乙 「そうさ、俺は自分勝手に我がままな男さ。だからこそ、俺は……」

S 50. 10. 27

## 僕にとって“雲”とは

地域文化コース2年 天 野

“僕の好きなのは雲さ……。流れて行く雲……。あそこを……。あの、類い稀な雲なのさ！”

C. Baudelaire

相互滲透的な連続的時間性。それが僕に語りかける。人間。

過去の不可逆性が、そして未来の不可知性が、僕に教える。この現在の唯一絶対性を。僕は離してはならない。

思い出さないで下さい。あの日のことを。過ぎ去ってしまったあの日のことを。それでもやっぱり。思い出して下さい。あの日のことを。過ぎ去ってしまったあの日のことを。

純粋な時間というものがあるとすれば、それは常に瞬間の出現と消滅とではないだろうか。

現在の中断。現在の消滅。そしてまた新たなる現在の甘受。僕を引き込もうとする未来。どこかへ！

純粋な空間というものがあるとすれば、それは、点の完全な連続と混在とではないだろうか。

現在の完成。現在・脱却。そしてまた新たなる現在の奪取。僕の求めようとする未来。僕のふと手にする未来。

一輪の花。朝の光に目覚めたばかりの一輪の花。そのやさしさが僕に問いかける。僕は応えなくてはならない。

現実の時間とは、過去—現在—未来という連続性にある。

時間に連続性を与えるのが空間である。とすれば、時間は空間を必要とするということができないだろうか。

連続性と持続性との絶対的な相違。

獣になりたい時がある。馬鹿も卑怯も丸出しで、吠え続けたい時がある。けれども僕には、どんな叫びも見つからなくて、このやるせないひろがりに、空を見るしかない時がある。

現実の空間とは、前後—左右—上下という異方性にある。

空間に異方性を与えるのが時間である。とすれば、空間は時間を必要とするということができないだろうか。

自己否定的な脱自性を本質とする時間的存在。意識。

空間は運動によって時間化され、時間は運動によって空間化される。現実性の捨象。

時間が不可逆的であることに対して、空間は可逆的であるということとはできない。時間は現実性としてのみあり、空間は可能性としてのみあるといえるのではないだろうか。

空間のない時間もなく、時間のない空間もない。

一匹の仔犬。昼の陽ざしをうけてうずくまる一匹の仔犬。そのぬくもりが僕に問いかける。僕は応えなくてはならない。

現在の瞬間とは、時間に与えることができる唯一の現実である。現在の瞬間。現在の实在。その同一性。僕には重い。

一杯のお茶。夜の冷たさの中で手にする一杯のお茶。そのあたたかさが僕に問いかける。僕は応えなくてはならない。どうしても。

## ハノイの思い出

林 道 恵

うすれがちな記憶を頼りに、30年前の敗戦前後のハノイのことどもを記してみます。

北部仏印（現在の北ベトナム）への日本軍進駐は、昭和15年9月下旬のことでした。フランスの敗北の弱みにつけこんで結ばれた「共同防衛協定」の名の下に、日本軍は北部印度支那に平和進駐したのでした。一挙に進出して来た日本の軍民は、フランス人にとっては招かれざる客であったことは間違いありません。現地の安南人（後のベトナム人）にとっても、同じ黄色人種とはいえやはり外国人の来入にほかならなかったといえましょう。

ハノイ市は東京湾の海岸から100 kmばかり内陸へ入った紅河デルタのほぼ中央に位置しています。紅河の流れに沿った沼地に、人工的に造られた西欧式近代都市です。パリッ子の理想は、ゆったりとした敷地内に建てられた2、3階建の1軒家に住むことだといわれますが、ハノイは、そうしたフランス人の夢を実現したような美しい静かな住宅街が大部分を占める都市です。

デルタ地帯の性格から当然といえば当然ですが、ハノイ市の標高は、低いところで6メートル、高いところで11メートルに過ぎません。そばを流れる紅河の水位は増水期には13メートルにも達し、堤防が切れたりしますと大変なことになります。市内に駐屯する日本軍は小部隊でしたが、それでも兵隊の訓練がときどき行なわれていました。そして、いわゆるタコ壺を、たまたま堤防上に掘ったことがあり、フランス側当局から洪水期の危険性を指摘されるのも当然でした。このタコ壺方式は、最近まで米軍機の空爆に対する市民防衛上の一つの手段となっていたようです。

昭和20年になると、米軍のフィリピン反攻がはじまり、日本との連絡が完全に止絶えてしまった当時の状況の下では、次は米軍の鋭先が西に転じて仏印への攻撃が今にもはじまるような気がしたのは事実です。軍当局の意図は知る由もありませんが、そうした情勢の下で、いわゆる3月9日事件が起った

のです。

形式的な外交交渉がサイゴンで行なわれたようですが、この事件は予定の作戦行動だといわれていました。命令伝達上の手違いから、ハイフォン港附近で、事前に彼我の軍事衝突が起り、その情報をもって善処方をフランス側から要請してきたので、早速日本軍指令官とフランス軍参謀長と会見が行なわれることになりました。その席上参謀長は激怒して、「それでもサムライか？」と一喝して席をけったということです。やがてハノイ市内で戦端が開かれ、翌日正午すぎに仏軍が降服しました。後日その参謀長——すでに捕われの身でしたが——のところへ筆者が連絡に行ったとき、「君となら話してもよい」と前置きして、捕虜になっている軍人の日々の生活上のことで何分の配慮をねがいたい旨の伝言を依頼されたのを憶えています。

3月10日から軍政に切りかえられました。まず、軍の布告が街頭に貼り出され、フランス人は総べてハノイ市内に集合、日没から日の出までは外出禁止、手元のピストル、ラジオ、タイプライターを持参せよ、というのでした。知り合いのフランス人が、前の二つは別として、三番目のタイプライターは理解に苦しむ、しかし布告は布告だから……と小声で話していました。また、日没、日の出の正確な時刻を聞きにくるフランス人もいました。彼等にとって、場合によっては処刑されるかどうかというのっぴきならない重大なことだったのです。

ポッドダム宣言受諾にともなう日本の敗北は現地では現地なりの大きなショックでした。未だかつて経験したことのない敗戦を前にして、どう考え、どう行動したらよいのか皆目見当がつかず、完全な虚脱状態に陥ったのは申すまでもありません。わずかに、外地に居る日本人はすべて本国へ送還せらるべしという条項はありましたが、それが何時どのような方法で実施されるかを知るよすがもありません。8月下旬には、早くも米軍の連絡将校が飛来し、そのジープに便乗した白人女性のさっそうとした姿が眼に

つきささる思いでした。

すでに現住民の間から独立を望む声が高まり、日本軍が退出すれば、すかさず仏軍が再上陸してくるに違いない、そのときは断乎として闘う、と異口同音に叫んでいました。その頃のある朝、市中央のプチ・ラック（小湖）の中の島に、例の星の赤旗がへんぼんとひるがえり、救国の父ホーチミンの入城近しというニュースが流れました。

北部仏印の日本軍の武装解除には中国軍が当たることになっていましたが、その到着を待たず、日本軍部隊からひそかに、かなりの武器弾薬が現地の独立派に流れたという風評が立ちました。このことについては後に、米軍側から警告が発せられたほどです。

ハノイ周辺各地の旧仏軍兵舎に陣取った若いベトナム（当時そう呼ばれていた）兵たちはその殆んど

が農民出身でした。彼等はそれまでの被搾取者としての飢餓状態とは打って変って栄養価の高い食事をあてがわれるとともに、連日の激しい軍事訓練で、2、3ヶ月もするうちに見違えるほど屈強な兵士に生れかわっていました。

他方、ホーチミン政権下の民主的大衆教育が除々に滲透し、人民の意識が高揚し解放独立を指向する気運がにわかに高まってきました。このような意識の高揚と前記のような強靱な兵力とが相俟って、1954年5月7日のディエン・ビエン・フウの歴史的な大勝利をもたらしたに違いありません。そしてこの勝利からえた絶大な自負心こそ、その後の長い長い米軍との言語に絶する苦闘の大きな支柱になったのではないかと思われるのです。

（外国語・仏語 教授）

## 総合科学部と旧制広島高等学校同窓会について

学長、学部長、旧制広島高等学校（広高）同窓会会長、文部省大学局長らは、こぞって総合科学部に広高の精神・伝統を伝えたい、あるいは、伝えるものとして発足したと述べている。具体的には、飯島学長は、総合科学部の設置は「旧制広島高等学校の基本的精神を新しく開花せしめて、青年に与えたいという念願に出発している。」と述べ（「総合科学」No 1 P 4）、また、今堀学部長は「…広島高等学校以来の伝統というものを新しい時代に生かす、そういう学部の発足…。」（「飛翔」No 1 P 33）と述べている。広高同窓会会長は、総合科学部生を広高の後継者と呼び「広高の道の伝統を末長く世に伝えたい。」（「飛翔」No 1 P 36）と述べ、井内文部省大学局長は「…旧制大学の伝統と旧制高校の伝統と、それに新制大学の貴重なる経験が織りなされて、初めて総合科学部はその花を咲かせることができるのではないか。」（「飛翔」No 1 P 35）と述べている。では、その伝統と精神とはいかなるものだろう。それ程よいものだろうか。

旧制広島高等学校は、大正12年（1923年）、昭和時代へ移る時期に創立された。それは、4年前にパリで第一次大戦の講和会議が開かれ、2年後には

環境科学コース2年 黒岩祐治

「治安維持法」が制定されるという時期であった。そして、大日本帝国が、これまでの朝鮮・中国への経済的・軍事的な帝国主義侵略を、加速度的に押し進めていった昭和の20年間に存在し、基本的には国家政策に追随し、これを推進する「人材」を育てたのであった。そして、原爆投下と共にその存在はついでたと言えるだろう。このような、戦前の歴史的背景の中で、広高の伝統と精神とは育ったのである。かくして、戦後昭和24年には旧制高校と訣別し、新制広島大学が新しい民主主義的教育・研究を目指して設立されたのである。一方、旧制高校がよかったと言う人たちは、さきの歴史を語ることをせず、ただ旧制高校は学問を広く片寄らずにやり、自由・闊達がっであった等々と言う。資料によれば、昭和5年において、大学予備（高等学校・大学予科）の全在学者数17,550人中の官立学校在学者数は7,700人余りであり、帝国大学在学者数は17,500人程度であった。そして、この官立学校数は25校であり、単純計算では1校当たり310名足らず、それも3学年全員である。（文部省年報参照）つまり、旧制高校生に大学の受験勉強はほとんど必要なかったのであり、大学と将来とを約束されたひと握りのエリートコース

にのった友人たちの「自由でのびのび、師弟関係がよかった」のは、けだし当然であった。一方で、言論・集会・結社・思想・信教・学問等の自由抑圧体制、天皇制・政府・軍部の政策・財界等への批判的言動の弾圧体制が進む中である。

旧制広高の伝統とは、上記のような昭和20年までの過程を、政府・地方官庁・企業・財界・大学等の中で担った「人材」を送り出した伝統に過ぎず、その精神とは、彼らの謳歌したという「自由」と「学問」はほうり出し、いやしくも学問をした人間の、自由と平等と平和を確立すべき任務とは裏腹の、社会情勢に順応し立身出世コースを歩むという精神だったのである。戦後においてもこの性格は、卒業者の中に大なり小なり残っていて、同窓会を中心にそれを後世に伝えたいとまで言う現状である。

私は、こういう伝統や精神をもった彼らの話を聞くのはいやだし、私たちは、それを聞く必要はないと思う。

現在、私たちにとって最も大切なことは、与えられたコース・体制・大勢に順応し、それにそって単に一生懸命やる、あるいは単に適当にやる、という態度ではなく、現在の社会・体制・大勢に含まれる矛盾・問題を自らの目と耳と頭で見出し、それを解決しようとする実践的努力である。現代の矛盾・問題は、人類の存亡に関係するものであるだけに、その努力は不可欠と言えよう。またそれなくしては、総合科学は内容の稀薄な、学問のための学問、研究者のための学問、実利を追求する学問に墮し、従前の学問や科学者の欠陥を補うものでなく、その欠陥を拡大するものになり下がってしまうだろう。

くり返すが、少人数教育・エリートコースにのった旧制高校卒業者の学生時代が、彼らにとって「よかった」のは当然であり、30年以上も昔のかすれた思い出から、「ぼくたち（女性はほとんど広高に入学できなかった——国際婦人年にちなんで——）の学生時代は」あであった、こうだったと美化した思い出など聞いても無意味ではなからうか。でも総合科学部生の中には、「私は、彼らの言うことを鵜呑みにするわけではないし、経験豊かな彼らの話を聞いて楽しければそれでよいではないか。」と言う人がいるかも知れない。しかしそれなら、なぜその世代の数パーセントを占めるに過ぎない旧制高校出身者とのみ関係を持ち、他の90数パーセントを占める旧制高校などには社会矛盾の中で行こうにも行け

なかった人々の、経験豊かな話を聞こうとしないのか。結局、大学側が我々の就職を一見「有利にするため」に仲介をした、彼らは年輩で経済的余裕があり、飲み食いもできる、就職時の「コネ」になる、などの理由しか残らない。ここで一見としたのは、広高の卒業者は既にほとんどが50歳を越え、会社ならば定年まぎわか定年に達した人がほとんどだろう。就職に関係する立場にある人が何人いるか疑問だし、「コネ」の就職が優先されて、正当に職に就こうとする人が後回しにされる社会的不正を是認し、それに頼るなどの行為は精神的墮落の第一歩であり、いやしくも青年にあるまじき行為だと思うからである。この精神的墮落のきざしとして、私は環境科学コースの前同窓会委員だから知っているのだが、総合科学部現2年の同窓会委員会には、事の成立を急ぐあまり、「現2年生だけで広高同窓会との関係を決めてしまおう。無関心な（昔の学校の同窓会に誰が関心を持つのか？）1年生からは反対意見も出ないだろうから。」などの悲しいかな非民主的動きのあることを付記せねばならない。

結論に移ろう。すでに記したが、そもそも旧制広島高等学校は約30年前に消滅したのであり、その同窓会と私たちとは何らの関係もないし、上記の理由で関係をもつ必要もない。いや必要ないどころか、むしろ民主教育・民主主義にとって有害でさえある。なぜならば、この文章の冒頭にあげた発言が、ここ数年来の政府・文部省・財界の旧制高校見直し論と、上からの逆コース的の大学改革・筑波化の動きと軌を一にするものと思えてならないからである。それは、従来の専門をやり続ける総合科学部の先生方を見てもわかるように、独自性の乏しい総合科学部設置の要求が、要求を出したその年の数か月後に文部省・政府に認められるという事の運びの速さと、そこに表われている文部省・政府の、広大教養部再編総合科学部設置への積極性に示されている。

歴史のとらえ方・現状認識に不十分な点もあると思うが、実利だけでものを考えないよう願ってこの文章を終りたい。

## ニューヨーク散見

志 邨 晃 佑

アメリカ通が言う。「ニューヨークはアメリカではない」。だがまた言う。「だがニューヨークも見なければ、アメリカはわからない」。ニューヨーク市は紙くずだらけ、犬のくそだらけ、そして相当以上に物騒な街だ。この街に、私は昨年9月から今年の6月まで滞在した。期間は短いし、見聞きたことは限られているし、それに所詮、見聞記などというものは一面的・部分的・主観的なものでしかありえないから、いっそ開き直って、マンハッタンの空っ風に舞う紙くずのような、とりとめない印象の切れっぱしを書きつけようと思う。マーク・トウエインではないが、この一文に「教訓を見出さんと試みる人は追放せらるべし」である。

### その1. 「用心せよ。だが恐れるな」

滞在期間の大半、500 River side のインターナショナル・ハウス（われわれはIハウスと呼んでいた）に住んだ。これは主に大学院生用の国際的寄宿舎だが、北へ2ブロック、東へ1ブロックで有名なハーレムの入口に達する。コロンビア大学へは歩いて約10分。付近に二つの大きな寺院、教育大学、女子大、むかしニーバーが住んだという有名な神学校があるが、概して安アパートと、雑多な小さな店の街だ。黒人とプエルトリコ系が多く、東洋系も目につく。当然のことだが、概して薄よごれた学生の姿が目立つ。すぐ近くに、ハドソン河に沿った数キロにわたるリバーサイド公園があるから、散歩の場所には困らない。タイムズ・スクエアやグリニッチ・ビレッジへは地下鉄が便利だが、この線（IRT 7th）はマンハッタンの諸線中一番おんぼろできたない。車輦の内・外は落書だらけ——もっとも落書は壁や扉にも多いが——。で、とくに外側一面のそれは、カラー・スプレーを使って念入りに仕上げてある。治安は良くない。友人になった日本人の一人は、まだ陽のある夕方、数人の黒人にアパートの空き室に引きづり込まれ、殴られたうえに現金と金目のものを全部を奪われた。よく通っていた酒屋にもまだ育の口に強盗がはいったし、中近東から来ていたある知

人も、もよりの地下鉄駅のそばの交差点で、財布を強奪された。Iハウスのスタッフは新来のわれわれに注意と助言を与えてくれた。街路であれ、公園であれ人気の少ない場所は避けること。とりわけ夜遅くは注意すること。やむをえず遅く帰宅する時は道の真ん中——車道であってもその真ん中——を歩くこと（強盗・暴漢に出会った時、逃げやすい）……。だがこのスタッフは続けて強調した。だが、ニューヨークは演劇・音楽・美術など楽しむべきものに満ちている。用心は十分にしてほしい。しかし快して恐れないで、ニューヨークの生活をエンジョイしてほしい、と。

### その2. “ I hate this country / ”

ニューヨークに着いてまた日も浅かった一日、マディソン・アベニューでバスを待っていると、横にいた初老の黒人の女性が突然わめきはじめた。大声で、まったくものすごい形相で何やら私に同調を求めてくるのだが、何を言っているのかわからない。途方に暮れ、日本人に恨みがあるのかと思ひ、何度



も聞きかえしてやっとわかった。彼女は「この国が嫌いだ。」と怒鳴っていたのである。少々もてあまし

ながら、やって来たバスに乗り込むと、彼女も隣に席を取って、白人の乗客たちをにらみ廻しながら、なお語りかけて来る。事の起りは、先のバスが彼女を無視して通り過ぎたせいらしいが、彼女は、この国は彼女らを無視し、見下している。と語り、だから来年は日本に行くのだという。何故だと聞くと、東京で整形手術を受けるのだ、という。その間、彼女は「この国は嫌いだ」を繰り返す、周囲の白人乗客は迷惑気で、むしろ小さくなっていった。

ニューヨークのカフエテリア、デパート、スーパーなどの店員の態度は概して無愛想だが、とりわけ黒人の店員はひどかった。乱暴で、愛想のかけらもなく、敵意を抱いているようにすら見えた。知り合いになったニューヨーク子でインテリの老婦人によれば、それは私が日本人であるため、というより、白人の仲間と見なされているからだ、という。彼女は、自分達も屢々そういう目にあい、二度と行かなくなる店が多いのだ、とこぼした。彼女はドアに鍵もかけずに寝られたニューヨークの昔を回想し、アメリカの大都市は絶望的に病んでいる、と言い、人間の攻撃・闘争本能を分析したフロムの新作を読んでいた。

### その3. 「シーザーのものは……」

ハーレムの入口、125 st. Broadway のスーパーでレジに並んでいると、すぐ前に居た5才ぐらいの黒人の男の子がキャンディを一個カウンターに置いた。レジの20才前後のやはり黒人の女店員が目顔でうながすと、男の子は握りしめていた1セント硬貨を5枚差し出した。キャンディは8セントだったか、とにかく足りない。どうするのか。足りないからお帰りと言うのだろうか。数秒、女店員は男の子をにらんでいた。と彼女は振り向いて、所在なげにたたずんでいた主任らしい白人の男を呼んだ。そして5セント出せ、という。主任はやゝあっ気にとられていたが、それでも不承不承財布を開いた。レジの女店員は主任から巻きあげた5セントに男の子の3セントを加えて勘定を合わせた。男の子が残った2セントとキャンディを握りしめて飛び出して行ったあと、彼女は「ネクスト」と怒鳴って私をうながしたが、私は不愉快でなかった。不気嫌に何やら口の中でつぶやいていた主任の顔を想いうかべつつ、帰途、ひとりにやにやしながら私もつぶやいてみた。「やるじゃない！」。

### その4. ある Civil War 論争

アンディはIハウスの同宿人のひとりだ。コロンビア大のロー・スクールを終って、成績も悪くないが、人づきあいの下手なせいもあって、就職口がない。それに大かたのユダヤ系がそうであるように、日本人好きで、日本人仲間の会にも、日本語はわからないのによくやって来る。ある晩、私はアンディにからんでいた。頭にあったのは、その数日前、コロンビアの「都市史」のクラスに同行して見学したニューアークとその付近の印象だった。ニューアークのスラムは十数年前に大規模な黒人暴動があったところで、その印象は全くすさまじいの一語につきた。家並と街路のきたなさ、殺風景さ、荒廃ぶり。その中には、暖かい人間の生活などいささかも残っていないのではないかと思えた。だが、そこから車で10分も走れば歎息をつくしかない美しい家並の町がある。この州(ニュージャージ)の別名「ガーデン・ステイツ」の名の通り、町がそのまま一つの庭園であり、日本の混雑した人くさい都会で育った私など、その美しさ、健全さに茫然とし、こんな町的生活など実は楽しくなどないのだと悪口の一つも言いたくなる程だった。

ともあれ、こうした印象を想いうかべつつ、私はアンディにからんでいた。やがてアメリカは第二の Civil War に見舞われるぞ。南と北の間のそれではなくて、都市と郊外ないし田舎との間の Civil War だ。都市のスラム化は、中産以上の白人の郊外への流出でなお進むだろうし、スラム都市対田舎の階級的・人種的乖離は、激しくなるばかりだからだと、愛国者でもあるアンディは反論する。都市のスラム化が進行するとは限らない。工場やオフィスはなお都会にあるし、昼間は都市に上流・中流の白人が通ってきている。私はなおもからんでみる。だが、近頃は工場やオフィスまで、都市を逃げ出しているのではないか。それに一步譲って、昼間そうであるにしても、夜には Civil War が起るはずだ。実はこの夜、私は大分酔っぱらっていて、生真面目なアンディを肴にオダをあげていたのだ。第二の Civil War うんぬんはむろん冗談のつもりだった。だが、この一夜の会話を、先きのべたニューヨーク子のインテリ婦人に、これも笑い話の積りでくり返してみたところ、その反応にこそ一驚した。彼女は、極めて真剣に言うのだ。それこそ冗談ではない。第二の Civil War の可能性・危険性は十分にある。

と。

### その5. あるアメリカ型発想

マンハッタンには、日本レストランも多い。その一つで、友人の日本人と、ニューヨーク大学の教授、その夫人と食事をしていた。二人ともニューヨーク子で、当然、相当以上のインテリだ。大食漢と自称する教授が我々の注意も聞かずに、刺身のわさびを丸ごと口にほうり込んで大騒ぎしたあと、夫人が突然言い出した。日本人は生ま魚を好むが、それは燃料が十分になかった為に生じた食習慣か。私は絶句して「ノー」としか言えなかったが、夫人はさらに追いうちをかけてきた。日本人は非常に礼儀正しく、丁寧である。それは日本が狭く人口が多かった為に人々が常に物理的に衝突しあい、争いになる可能性があったから、それを避ける為に丁重で礼儀正しい態度が発達したのだと思うがどうかと、と。私は再度、「そうは思わぬ」と答え、封建的な身分制秩序の……、といったありふれた説明を頭に浮かべはしたが、説明はやめにした。一つには英語での説明が面倒だったせいだが、いま一つには、いかにもアメリカ人らしい即物的解釈に感心し、そんな馬鹿な、と思いつつも、ひょっとして的確を得た解釈なのかも、という思いが一瞬頭をよぎったせいであった。

### その6. ピアノ・バーの日本人

ニューヨーク、いやアメリカには日本人に好意的な人々が少くない。日本訪問ないし滞在で好印象を持ち帰った連仲が多いことも理由の一つだ——バーモントの田舎の飲み屋で、初対面の私に酒をおごり、ピアノ引きに日本の歌をひかせようとし、何くれと気をつかってくれた実業家もその一人だ——が、そうした経験を持たぬ日本好きもいる。時折り通った日本式バー兼レストランには、日本人の落ち着いた雰囲気が好きで、週に一度、ニュージャージの田舎から通ってくるという80才を越えた老人がいたし、日本酒のほか生ま卵と米の飯しか注文せず、バーテンを敷かせていたセールスマンもいた。

その店で知りあった私よりすこし年下のアメリカ女性は、武田製菓のニューヨーク支店に勤めていたが、まったくの日本好きで、マンハッタンに幾つかあるピアノ・バーの一つに案内してくれたのも彼女だった。ピアノを囲むカウンターと幾つかのボックス席があって、客は次々にマイクをまわして、ピ

ノ伴奏つきで日本の唄を歌う。はじめて見たが30数冊に及ぶ歌謡曲全集が積んであって、歌う唄には事欠かない。9時頃までは、ニューヨーク支店に勤める日本人サラリーマンが多い。10時、11時ともなれば、学生や学生くずれ、レストランに勤めたり、音楽・美術に関係するもっともくだけた連中が多くなって、歌もはづみ雰囲気も盛り上がる。第一波の客達をはじめて見た時、私はやゝ違和感を覚えた。彼らはそろってダーク・スーツに身を固め、ネクタイをしめ、上役と覚しい男にお世辞をつかい、彼の命令(?)で順番に歌った。彼らはおとなしく、静かで、歌も決してうまくなかった。服装・態度とも、もっと自由でのびのびしているアメリカ人一般、さらに遅い時間にやってくる歌もうまく、くだけている日本人の客と比べてすら、彼らの印象は非個人的で、団結しており、何かしら不自然に、異様に見えた。外国に来て日本人のとくに団体を目にする一種の羞恥感を覚えるし、それを得々と批評する日本人はより一層いやらしいものだが、その時はついうっかりして、同席していた例の極めて日本びいきのアメリカ女性に、こうした印象を語ってしまった。すると彼女は憤然と反論した。何が異様、不自然なのか。異国の地で日本人が集り、静かに酒をくみかわし、故郷をしのんで故郷の唄を歌う。健全でむしろ美しい光景ではないか、と。私は一言もなかった。

(英米研究 助教授)



# 仙人にはカナワナイ

どこまでが冗談か本気かわからない環境科学コース。そのジョーク野郎たちが野外調査に行った。マジメな話を取材することは、このコースに対しては難しいと感じた学生側広報委員では噂の「環境日誌」より抜粋することにした。生の声を露骨にスクープできる。ヒソカに潜入

したM記者は、同コースに所属するために、内部的反逆なる大罪を意識して苦しみながらも、その全貌をマイクロフィルムに収めた。公開することにより彼の命がなくならないことを祈りつつ、では一。

## 9月8日 ハレ

秋期休暇中の地学の旅行は新見<sup>にいみ</sup>(岡山)などに行くだろうということである。1日か2日ずつ違った先生が来て、それぞれの専門の話をする事になっているらしい。費用は2~3万円で日数は3~5泊の間らしい。安田先生は車で行きたいらしいが、どういわけか(F君が運転すると言い出すと恐いからかも知れない)汽車で行くらしい。泊まる所はYHか、または民宿かホテルだろう。YHの会員になってない人は早く入っておこう。紙屋町の所へ行けば1,000円と写真を出せばすぐに入れる。Report? 伸 単位は1単位くれるそうである。

## 10月2日(木)曇り、時々、小雨

8:30 広島駅発。いざ新見へ。

駅で社会文化の藤原と出会った。彼は信州へ行くのだと言う。当然新幹線で行くのだろう。僕はディーゼルで行くとはとても言えなかった。まだ封建時代は終わっていないのだとつくづく感じた。

塩町層 海運が進んで云々。今井知之説明不可。ヤマーの角切りこんぶ(だしこんぶ)。60/98円。おしゃぶりこんぶとまちがえた。

備後落合にて。そばを食べた(藤本君は“うどん”)。200円。味はまあまあ(←上級形容詞)だったが、つゆがさめていた。このごろから雨が強くなった。

11:50 新見着  
 ↓—— 昼食  
 12:40  
 ↓  
 本郷  
 巡検  
 4:30 旅館着  
 期待通りの旅館だった  
 6:00 夕食  
 7:00 meeting  
 9:30 消灯



### 10月4日(土) 濃霧

昨夜スナックで水割りを飲んだ。薄かった。2人のブスなおばさんがいた。よけいまずくなった。

#### 結論

新見に美女を見た。

#### 野地

若山牧水の歌碑があった。

#### 東城

全く美人がいなかったが、列車が出る直前になって、右手より女子高校生の集団がこちらへ歩いてきた。東城の高校生であろう。その中にアン・ルイスそっくりの生徒がいた。僕と甲斐君とで、ずっと彼女を見つめていたら、その娘はポーズをとっていた。さすがモデル出身だと思った。(美人がいらない)理由。昔々、岡山にウラという鬼がいたのであります。その鬼がどうかげんかMのようにすけべえで美女ばかり好んで食べたそうなのです。そのために岡山には美女がいなくなったのです。そのウラは吉備津彦のミコトによって退治されたのです。そして吉備の国を平安にしました。その功によって建てられたのが吉備津神社です。

8:20。久しぶりに太陽が出た。雨男・佐田先生がいなくなったからだろう。稲穂の間を、列車は秋の東城の町を通り、山々の中へ入っていく。そして空には太陽がいっぱいだ。

### 10月5日(日) 雨

朝6時10分起床。

6時20分より読経。6時35分より庭そうじ。

今日も健康に恵まれて有りがたい、有りがたい。

寂しさや 耳にしみ入る 雨の音(芭知)

道後山 つわものどもの 夢枕

風雨の中を、道後山頂まで登った。甲斐君が行きたい、行きたいと、駄々をこねるから、しかたなく先生方も同意し、登った。さすが黒岩・岸本の両イントン者(仙人)たちは、山に登り慣れているので、速い速い。山頂は風雨強し。やはり、柏田君は遅れてきた。午前11時に下山して、山荘着。11時20分ごろ、昼食。11時40分、旅は続くのだ。山荘のおじさんに別れを告げ、道後山麓まで下山。仙人速し、柏田遅し。用務員安田さんのミスで、日曜日のバスの時刻が平日と違うことを始めて発見。こりゃいかん。安田よ、眼光紙背に徹せよ! 要所要所をおさえて。それでは松田先生のような、助教授にはなれんぞ。柏田くんを見よ。

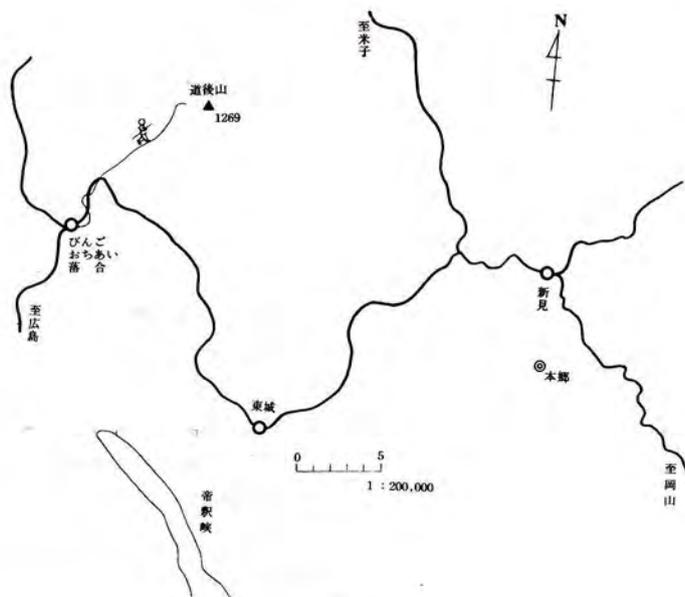
結局、道後山麓から備後落合まで歩いた。地図の上ではほんの少しの間しかないが、実際はその5万倍だから相当なものだ。途中で雨がやんで晴れてくれたのが幸いであったが、重い荷物をしょって歩くのは大変なものだ。甲斐君は背中がむけるし、藤本は腹の肉がなくなるし、僕は尻を脱臼した。しかし世捨人は速い。柏田君遅し。3時20分頃、備後落合駅に着く。用務員安田さんが僕らに、「ええ運

動になったやろ。」とおっしゃった。僕は「安田さん ありがとう。」と言った。本当に脚力がついた。これで10月25日のソフトボール大会では走る野球ができる。優勝できなかつたらうそだ。その反面、年寄りの疲れはとれるのが遅いので、そのときまでの疲労がたたって、思うように動けないのではないかという焦躁にかられた。

仙人は馬場とまんじゅうを買った。我々3人も、牛乳と菓子パンを買った。しかし、馬場さんはやはり体力がある。斜面に垂直な格好で山を登る。これはどういうことか。彼の体には重力はどの方向にはたらくのか。普通の人間だったら、垂直抗力に拘束されてあんな格好で山に登れまい。いかなる理路整然とした理論も、全宇宙の中のほんの一つの例外があることによって、もろくも崩れ去る。ニュートンが体系化した力学も、ジャイアント馬場にはかなわなかったのか。

#### 取材を終えて

やはり日誌にも冗談しか存在しないことがわかった。環境日誌には平仮名の占めるパーセンテージがこれよりも大きかったが、当生としても環境に所属する身。恥をかけぬよう配慮した。よって内部暴露の罪でリンチにあうこともないだろう。でもこれで環境の学生はキャンパスを歩けなくなったかもしれない。折りしも学内清掃キャンペーン実施中。私は最大の功労者となってしまったようだ。(えむ)



# 『シェイクスピアのソネット——愛の虚構——』

田村一郎・六反田収・坂本公延・田淵実貴男 共著

文理発行 3,500 円



この本の内容は仕事の面から言って三つの部分から成っています。ソネット研究、ソネットの日本語訳、コメンタリーです。

先づソネット研究では、四人のものがそれぞれの研究分野に関連するところで四篇の独立した論文を書きました。結果的にはそれが、イタリアに於けるソネットの発生から英国への移植、シェイクスピアによる英国的純化と開花、さらにソネットと現代とのかわり合い・ソネットの現況といった歴史的通観の役目を果たすことにもなったようです。或る書評で私たち四人の論文について次のように言っていますが、うまく要約してくれていると思います。

巻頭の論文では六反田氏がソネットの発生から英国に移植されるまでを辿り、田村氏が Shakespeare の劇との関連を論じて Sonnets への良き序論を与えている。続く田淵氏は

Dylan Thomas と R. M. Rilke を取り上げ、ソネット形式が今に生きていることを実証し、最後に坂本氏が Sonnets を「愛の虚構」という視点から解明して見せる。

(「英語青年」1975、11月号)

次はシェイクスピアのソネットの日本語訳です。154 篇のソネットの全訳は坪内逍遙氏の手になる文語体のもと、詩人西脇順三郎氏によるものとの二つあるわけですが、私たちはやはり新しい世代の意気込みで新しい現代日本語への移し変えを企てたのです。難解な原詩を成るべく分り易く訳すことと、原詩の意味にできるだけ忠実に添うよう心がけたつもりです。詩作品程翻訳不可能なものはないのですが、これ程また自国語に移したくなるものもないのです。このことは或る意味で詩というものの側面を

象徴しているかも知れません。日本には上田敏、佐藤春夫、中原中也、などによる良い訳詩がありますが、これらの先達を見ても分るように、訳詩はやたら濃密な調子をつければよいというものではありません。低俗に流れるだけで「詩」が失われます。反対に詩心のないものの手にかかると、訳詩として読むに耐えないものになります。（何よりもしかし、原詩が金であることが必至の条件ですが）私たちは無意識のうちに上のようなことに留意していたように思うのですが、結果は時日によって審判されるしかありません。

最後にコメントリーですが、ここでは合評形式によって154篇のソネットの背景とつながりを探り、各篇の内容を構造と意味から吟味していったのです。シェイクスピアのソネットは、詩人のパトロンである或る若い貴公子に捧げられた詩群と、「黒婦人」との恋愛をうたった詩群とに分れるのですが、テキストにも異同があり、多くの学者が注釈をつけていてそれらの間には解釈の違いもまた多く見うけられます。私たちはこうした最近のソネット研究をも紹介しながら現代の眼で読み込むよう努めました。

訳詩とコメントリーについての評として上掲の、「英語青年」から再び引用してみます。

通読して先ず感じたのはソネットの訳が明晰で、かつ朗唱に耐えるハリのある日本語になっていることである。ソネット集の国語全訳として記念すべき仕事であると思う。

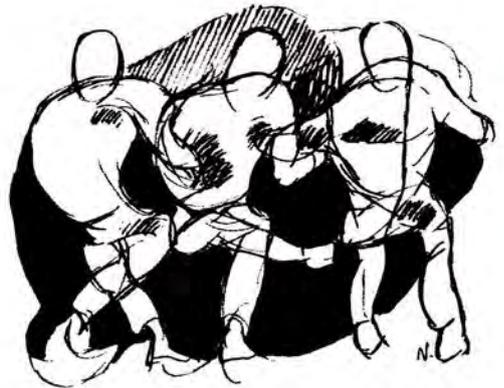
本書の庄巻は中心部を占めるコメントリーであろう。これは四人の共著者の毎週の討論の成果をまとめたものだという。四人はそれぞれ専門分野を異にしているが、永く内外の詩の読書会を続けて来たそうで、気心の通じた仲間同志の対話の良さが十分に発揮されている。つまり真向から対立する意見の持主が、自説を主張し、相手の弱点を突くというのではなく、各自がそれぞれの見解を持ちよって話を交わしているうちに、お互に啓発され、深い共通の理解へと進んでゆく、という形の討論である。前者の方が第三者には面白いかも知れないが実りが多いのは後者である。説得力のある新鮮な解釈が諸所に見られるのも、このように開かれた精神による緻密な対話の故であろう。また個々のソネットを論じながら、ソネット集全体との関連にた

えず気を配って考察が進められているのも、本書のコメントリーの秀れた特色である。この点で先頃本誌に連載された Sonnets 合評よりも豊かな成果を挙げていると思う。

1969年の春私たちが日本の現代詩を読みはじめた頃、私たちは四人の頭文字と“Translation”を組合せて「TRSTの会」と名づけ、萩原朔太郎、高村光太郎、中原中也、伊東静雄などの作品の解釈分析、英訳を試みていました。毎週土曜日に大学の研究室に集まってそんなことをつづけているうちにシェイクスピアのソネットを読もうということになったのが1971年の2月ごろでしたから、この会は足かけ5年つづいたことになります。

週一回きまった会合を持続するということはお互いの犠牲を何がしか伴うものですが、一応の目的を果たすまでこれがつづいたのは、何よりも会そのものの楽しさが原因だったようです。

(外国語・英語)



# 三つの書評

時折、言葉が沈黙以上に思える時がある。それは魂をゆさぶる書物に接したときである。そんな時、言葉は単なるイロニーとしてではなく魂の潮流となって私達の心に流れ込んでくる。そこには、言わば魂と本との一つの出会いがあるわけであるが、混迷し、雑多化した書物の氾濫の中において“よい書物”を見つけるのは現代の中で“やさしさ”に触れるこ

とほどにむずかしい。おまけに、選ぶ側の角膜がぼやけていたり、盲になっている場合が多いため、出会いはさらにむずかしくなる。そこで私達、学生側広報委員はいわば未熟なる直観によって三つの書物を選択し、三人の先生方にその書評を依頼した。学生になにがしかを訴える書物を学生自らが選んだ所にこの企画の主眼がある。

## 林 達夫「思想のドラマツルギー」を読んで

今 堀 誠 二

「戦前、戦中のヨーロッパ研究にチチェローネ(水先案内)の役割をはたしてくれた林達夫は、6巻の『著作集』が物語るとおり、専門の間仕切りにこだわらない『学際』『芸際』的研究姿勢とこの姿勢の実行から結果する学識の広さにおいて、われわれ後輩の文字通りグラン・メートル(大先達)である」本書のはじめに、対談者の久野収はこう記している。その久野収も、日本研究のグラン・メートルであるから、本書は読みはじめたら途中でやめることができない魅力にみちた対談となっている。

例えば次のような調子である。林の発言である。「明治大学の文化史の開講の辞で一席やった—『諸君、羽仁五郎の都市の論理をよまれた人は多いと思うが』と口をひらくと、みんないっせいに聴き耳を立てるでしょう。すかさず僕は『彼は僕の古くからの友達だが、彼を一口で言えば、雀百まで踊り忘れず』という、みんなドッと来る。『もう一つ言えば阿呆の一つ覚え』。するとまた一段とわき立つ。『しかし諸君、これは悪口だと思ったら大違いだ。これは最大限のほめことばだ—レトリックいやレトリック過剰と言わんで下さい。本心から言っているんです』。

羽仁五郎の『明治維新史研究』にしても、戦前に、あれだけの立派な論文を書いた人は稀で、歴史学界の最高水準を示している。しかし、戦後に、この論文を少しも発展させることが出来ないで、昔のまま

の形で、同書を発行しつづけていることは、バカの一つ覚えである。しかも、その一つ覚えが、今日もなお有用性をもっているところに、羽仁のえらさがある。このドラマツルギーは美事なできばえと言える。

林の『ある魂の発展』(ストリンドベルグ)『わがさまざまな思想史』(アラン)に登場する人物は、まことに多彩である。それをひき出していく久野の『巡歴』もまた申し分のないものである。昭和の50年の思想史の精華は、本書に集約されている。だが、それが、十分なものだとは言えない。例えば次のような対話がある。

久野 「高橋和己の小説、あれは大衆小説の作法ですね。(中略)それにしても彼の研究および評論は大したもんだと思います。」

林 「そう。もう15年にもなろうか、『李商隠』が出た時、その解説を何気なく読んでひどく感心した。えらい奴が出てきたもんだ、と。それが、彼の名を知った最初だ。」

久野 「彼は学者、研究者ですね。」

林 「卒直に言って、小説家になって惜しいことをしたね。大損失さ。学者としてずっとやっていればよかったと思うな。吉川幸次郎氏のあとを継いで、いろいろな穴を埋める人は、彼をおいていなかったのでは……」

久野 「ですから吉川氏は強引な仕方、彼を後任

に推したわけです。」

私には、高橋和己の小説を評論する能力はない。問題だと思うのは、高橋の学問を評価するにあたって、吉川幸次郎に価値基準をおき、高橋は吉川の後継者だから偉いのだというレトリックである。試みに吉川をエドガー・スノーと比べてみたとき、むしろ偉いのは吉川だろう。しかし吉川は、スノーと同じく、1930年代に中国に居住しながら、延安を訪問しようとしなかったし、1970年代到北京を訪れながら、ニクソン訪中のような、歴史を創造する仕事をやりとげ得なかったのである。林と久野は、その吉

川を基準にして、高橋を評価しようとしているのである。それだけではない。中国研究の範を内藤湖南に仰ぎ、漢学とジャーナリストをつなぎ得る人物として、高橋に期待しているのだが、内藤も漢学も日本のジャーナリストも、新中国への展望は全く持ち得なかったのである。彼らのアジア研究は、本質的な欠陥をもっているというほかない。

それにしても本書が、まれにみる名著であることを疑う人はあるまい。広く推奨したい。

(総合科学部長 アジア研究教授)

## 三島由紀夫 “近代能楽集” を読む

中 川 徳之助

皮の鼓(つづみ)は鳴る鼓。綾(あや)の鼓は、鳴らぬが道理。鳴らぬ鼓が鳴った時、思いをかなえてあげると女は言う。打てども打てども、打てども鳴らぬ鼓に、男は池に身を投げて死ぬ。

鼓も鳴らず、人も見えず、こは何となる神も、思ふ中をばさけぬとこそ聞きしものを、などされば、かほどに縁なかるらんと、身を恨み人をかこち、かくては何のため、生けらんものを池水に、身を投げて失せにけり、憂き身を投げて失せにけり。

古典能“綾鼓”の一節である。“道成寺”では、恋の執念に蛇体と化した女が、梵鐘の中に隠れた男を、鐘もろともに焼きつくす。

一念の毒蛇となって、川をやすやすと泳ぎ越し、この寺に来たり、ここかしこを尋ねしが、鐘の下りたるを怪しめ、竜頭(りゅうづ)をくはへ、七まとひまとひ、炎を出だし尾をもってたたけば、鐘はすなはち湯となって、つひに山伏を取り終はんぬ。

能の世界は妄執の世界、愛の世界である。燃焼する生の炎を、謡曲の作者たちは、冷たく詞章に閉じこめる。謡曲の詞章は襦袢の錦と言うが、切れ切れの美辞が織りなす観念の世界に、人間の妄執は水柱の花のようだ。能の幽玄な演技が、青い炎をさらに青くする。

三島の世界では、炎は白い。ことばの堆積が妄執の影をやどす。たとえば、こうだ。

笑いなさい! 笑いなさい! いくらでも笑いなさい! ……あんた方は笑いながら死ぬだろう。笑いながら腐るだろう。わしはそうじゃない。…わしはそうじゃない。笑われた人間は死にはしない。…笑われた人間は腐らない。

“綾の鼓”の男は、こう言って命を絶つ。

「あなたがそんな言葉でとどめを刺したつもりでいるのは、それは影よ。」(邯鄲)「そら又しゃべる。言葉で何もかも台なしにしてしまう。また人間の声が消えてしまった。」(弱法師) — 不信を宣告されることばが、そのまま妄執の影をやどすという奇妙な関係。“綾の鼓”で言えば、下手の部屋は古ぼけた部屋・善意の部屋・真実の部屋、上手の部屋は最新流行の部屋・悪意の部屋・虚偽の部屋、そこに人間が登場する。冷淡、無関心、軽薄、強制、現実— その高貴と卑俗とを典型化し、不潔が純白を、真剣が遊びを、ことばがことばを浮き立たせ、妄執の影



が現れる。妄執の影 — そう、三島の世界では、堆積することばが、そのまま妄執の霧を吹きはらう風ともなる。だから、所詮、妄執の影である。

中世人の思念では、仏法が妄執を晴らす。

祈りつめられかつばと転(まろ)ぶが、また起き上がって、鐘にむかって、吐く息は、猛火となって炎にむせば、身を焦がす悲しさに、日高の川波、深淵に帰ると見えつるが、またこの鐘を、つくづく、またこの鐘を、つくづくとかへり見、執心は消えてぞ失せにける。(道成寺)

三島の世界では、仏は死んだ。ことばが仏に代わる。仏が死ねば、「妄執」もただの「執心」と言うべきか。しかし、三島の世界では、ことばの堆積にやどる執心は、ことばの堆積のうちに解体现象を起こしはじめる。だから、依然として妄執の影なので

ある。

顔が笑うとき、骨は笑っているんだ。それはたしかさ。しかし顔が泣いているときも、顔の骨は笑っているんだ。骨はこう言ってるんだよ、笑わば笑え、泣かば泣け、今に俺の天下が来るんだ、ってね。(邯鄲)

能がちりばめた観念の断片を、三島は丹念にことばの堆積に置きかえる。警句に満ちた冗舌が、存在の沈黙を垣間見させる。

読み終えて、思う。“近代能楽集”の世界は、結局、小乗の世界ではないか。いや、三島には、大乘的世界は汚穢と虚飾、妥協と屈辱の世界だった。だからこそ、能の世界に現代のことばのこだまを聞くとしたのだ。

(日本研究 教授)

## 遠藤周作著 『わたしが・棄てた・女』

水 島 裕 雅

作家遠藤周作氏にはいくつかの顔がある。氏は「神々と神と」を出発点とする真摯なエッセイストであり、また「堀辰雄覚書」を始めとする優れた文芸評論家である。氏は敬虔なカトリック作家であり、『カトリック作家の問題』を始めとして、『沈黙』、『聖書のなかの女性たち』、『死海のほとり』、『イエスの生涯』等の問題作を書きつづけている。そしてまた、日本人であることとカトリックであることとのせめぎ合いの間から、『留学』、『白い人・黄色い人』などの比較文化的観点に立つ諸作品を世に問うた。また、氏は狐狸庵先生として『狐狸庵閑話』等の軽妙な人生批評家でもあり、週刊誌で首相夫人

と対談する一方で学生たちの人生相談を引き受けたりするし、また日本における数少ないユーモア作家として次々と抱腹絶

倒、破顔一笑、嚙嚙、噴飯、嗤笑、苦笑、微笑、哄笑のユーモア小説を次々と生み出している。ところで、ぼく

が学生編集委員より書評せよと渡された本は『わたしが・棄てた・女』(昭和38年『主婦の友』に連載翌年文芸春秋社より刊行。ただし「わたしが・渡された・本」は講談社文庫、昭和49年第9刷)であるが、この本はそうした遠藤周作文学のさまざまな魅力を打って固めたようなものとなっている。

男やもめに<sup>うし</sup>蛆がわく……

むかしから言われてきた言葉だが、慎みぶかい<sup>みなさん</sup>読者姉妹はまさか、若い青年二人の下宿を、のぞかれたことはありますまい。彼等がいかにも物ぐさで、その住む<sup>すむ</sup>部屋がいかにも乱雑で、臭気にもちているかを<sup>じか</sup>にかいで見たくもありませんまい。

しかし、貴女にもし、遊学されている愛すべき兄弟、恋人がおありなら、ある日、突然、その下宿を奇襲されることをお奨めしましょう。襖をあけられた途端、あなたは、

「まあ、いやッ。」

顔をあからめ、絶句なさるにちがいない。

物語はこのように女性読者に対する軽妙な語り口で始まる。読者はそのまま最後までするすると読みすすんでいくであろう。ちょうど口当りのよい酒があとをひくように、あるいは上質の塩センベイともいふべきか。そして読者は思いがけない陶酔に、



あるいは飽食感にたどりつくのである。

ところで物語りは、敗戦後3年たった東京で、軽い小児麻痺をわずらった貧しい大学生吉岡努と、父親が3人の子供をつれた女性と再婚したため、新しい母親の倅せをさまたげないよう働きに出た田舎娘森田ミツの雑誌を通しての出会いに端を発して、二度目のデート（男は女を〈ものにして〉棄てる）、そして2年後の再会と進行し、やがて吉岡努は自分の勤めている会社の社長の姪三浦マリ子と結婚し、癩病院で働いていた森田ミツの交通事故死で終りをつけるという、ごく平凡な筋なのであるが、その読後感には、軽妙な語り口にもかかわらず、奇妙に重たいものがあるのはなぜだろうか。

吉岡努は平凡な男である。森田ミツもまた平凡な娘である。だが彼は彼女のことを〈聖女〉だと信じるようになっていった。読者は吉岡努の手記によって一人の男の心の軌跡を知らされ、また三人称体の客観的描写によって森田ミツの言動を知らされることによって、聖なるものの存在を確信させられていく。

ぼくはあの時、神さまなどは信じていなかった

が、もし、神というものがあるならば、その神はこうしたつまらぬ、ありきたりの日常の偶然によって彼が存在することを、人間にみせたのかもしれない。理想の女というものが現代にあるとは誰も信じないが、ぼくは今あの女を聖女だと思っている……。

一人の薄情な男がこう確信するにいたるには、一人の無垢な女の人知れぬ純真な言動が必要であった。そしてその女は、そうした移り気な男を非難することなく、最後までその男を愛しながら死んでいくという、はなはだ男性にとっては虫のいい物語りなのであるが、そこには遠藤周作氏の「女性」というより「母なるもの」というべきものによって救われていく一つの魂という、終生のテーマが表わされているのである。

ぼくはこのテーマを彼の師であった堀辰雄の諸作品、とくに「曠野」という短編と重ねてみたいという誘惑にかられるが、与えられた紙面をはるかに越えてしまった。一読をおすすめして筆を置く。

（比較文化研究 講師）

## 勝者は語らず

負けてくじけぬ明るいよい子。環境科学コースです。だはっ、敗れてしまった。今年度1勝3敗。勝星が恋しいです。しかし、負けても人気の環境巨人軍。雌伏26年して、いつか環境カープとして奇跡のV1を手にします。26年目に乞う、ご期待!

環境はどーしてこんなに弱いんでしょう。今回はキョーショクインと1年Aの両チームが相手。おっかしいな、いや当然か。ま、ナインにちょっと(盗み)聞いてみましょう。

エースの今井、第1試合終了後、「球威がなかった。マウンドからキャッチャーまでの距離が思ったよりあった。練習ではよかったんだが。」彼には打席に立つと「今は本番だぞ。」という声がかかっていたのですが、やっぱり地の冗談プレーが出たんでしょうか。キリッとしたカオが印象的でした(と、ここには書いておこう)。第1試合でランニングホームを放った藤本は「あ〜あ。」主砲上野は、「ヒゴモッコスと……(省略。とにかく不出場)。」環境科学の世話人、第2試合のトップでライトは安田さん、「あはー。負けかあ。」第1試合セカンドで先発の黒岩、「赤潮の講義まで頑張っただよ。」試合前ポジションはベンチと言っていた佐野、「2時から……」と第2試合不出場。その代わりに出場予定の杉田。それまで人員不足の社会にいたそうだが、今度はまた人員不足の1年Aに参加。骨肉の争いとなった。「1年生はやる気ないんだな。」と言う小寺は第2試合のセンター。松波は、「頭脳に続き、ソフトでも勝利を得られなかった。」と嘆く。キャッチャーorセカンドの村田。教職員との試合では、さかんに相手チームと言葉のやりとりをしまし

## 敗者は語る

た。自分の事なので、もう少し詳しく述べると、彼は、安田さんに「腰が入っとらん。女みたいにナヨッとしている。」と言われた打席で弾丸ライナー。続いて二盗三盗。一人気を吐いていました。何? その一打以外は冴えなかったって。そう、知ってたんですか。こら板野、あやまらんかい。「すみません。すべて僕が悪いんです。」よろしい……(ボカッ)。柏田に平瀬は快打一発。一塁の森もリリーフに登板した。彼らの声は残念ながら収録できませんでした。これでナインの紹介を終わります。ン? おい、そこに行くのは吉田じゃないか。おまえの感想は一。「教育原理はワリとおもしろかった。」「なんと…(ドテッ)。」 応援団: 岸本・大場・吉田&岩田(情報)

チューターの藤原先生、ボクらをいじめる活躍。う〜ん、ボクたち、いじけちゃう。秀先生は第2試合を観戦、「後半よかったのね。」そーなのです。第1試合は前半、第2試合は後半、とても「やるう〜」だったのです。だから両方つなぎ合わせれば「グッ」だったはず(誰? 悪い半分をくっつけるのは)。ムードの方も「両試合とも押し気味」と藤本らが言っていました。周りの人はどう見てたかしら。秀先生はカメラを持ってきたのに写してなかったので、松波と村田が優勝カップを中にして写ることになりました。できあがる写真には幻の優勝を喜ぶ二人の顔が写っているでしょう。しかし、その心の中のとんと虚しかったことか。やっぱり勝たねばなりません。ネッ、古葉ちゃん。

終感「3試合やらなくてよかった。ホント、ちかれたびー。」

## 編 集 後 記

ばかだなあ  
睡眠不足と吸いすぎで  
頭が痛くなっちゃった  
昼下がりの研究室  
原稿の草稿を書かなくちゃ  
眼も痛いよ  
陽が  
机の端っこにあたっている  
こっちへくるまでに仕上げなきゃ  
その頃には授業を終えたみんなが  
戻ってくるだろう  
一人  
材料を読み返し まとめながら  
ボールペンを走らす  
また一日  
青春が過ぎた

(えむ)

原稿総数も、15を越え、「飛翔」も3号目にして  
やっと軌道に乗ってきたようであるが、又それなりに  
矛盾も多いようである。

例えば(その1)、学生=頼む人、先生=頼まれる  
人、ギョー、「ごめんください」、「今いそがしい」、  
ボタン、先生への原稿依頼の典型的なパターンであ  
る。世の中の「きびしさ」は、大学とて例外ではな  
いようである。

(その2)、学生側の原稿総数は、10ほどあるが、  
そのうち一年生の原稿は、唯一つである。この事は、  
一年生を中心とした広報活動がなされていない所に  
起因する。広報活動は、確かに地味ではあるが、先生、  
学生との接触の機会も多く、自分の専門、自分の世  
界に閉じこもらず、広く大学生活を送っていく上で  
の良い刺激になると思う。よって一年生の中から、  
広報委員を自主的に選任することを要望する。

ともあれ「飛翔」No.3は、2つの企画を中心にし  
て、力作ぞろいなので、スミからスミまで、ヒマな  
時間を見つけて読んでいただけたら幸いである。

(T.N)